『令和５年度刀根山支援学校運営協議会　第３回会議　議事録』

日　時：令和６年２月 13 日（火）15:00～16:00
場　所：本校（多目的ホール）
出席者：＜協議委員＞
井村　修、山田　亨、川見　ゆか、齊藤　利雄、平賀　健太郎、宗戸　和幸
＜事務局員＞
福井　浩平、髙原　浩徳、笠岡　一行、洲本　昌悟、三澤　誠一、桑名　智寛、船木　雄太郎、小山　輝雄、池上　真由、阿部　壮太
欠席者：＜協議委員＞

１．学校長挨拶

２．報告・連絡

（１）各部署の教育活動の状況について

本校訪問教育部:

今年度、サウジアラビアやモンゴル、台湾、沖縄等の国や地域とオンラインでつながり、交流やオンラインツアーを通して他国・地域の文化ふれることのできる授業を実施した。また、本校の HP に掲載しているデジタル作品展について、本校教育部高等部3年生1名と訪問教育部、分教室に在籍する児童生徒等の作品を展示している。さらに、訪問教育部の児童生徒と精神分教室の児童生徒で、植物栽培を通したオンラインでの交流学習を実施した。

現在、来年度の本校教育部在籍の児童生徒はいない。そのため、今年度も実施した相談会については、来年度より学校間での相談形態への変更を考えている。本校のセンター的機能として、引き続き刀根山医療センターにもご協力いただきながら、地域校に在籍している筋ジストロフィーの児童生徒への支援は継続して実施していきたいと考える。

最後に、ロボットプログラミング選手権全国大会への出場。一回戦敗退の結果ではあったが、本校教育部の生徒と訪問教育部の児童が同じの目標に向け、プログラミングを考えていく過程に、児童生徒の学びの深まりを感じることのできる大会であった。

精神分教室:

現在、コロナや学校でのいじめ等を理由に不登校となった生徒の在籍が多い。さらに、自閉症と診断される児童生徒も増えている。

今年度、子ども主体の活動となるよう各行事の計画から実施までの内容を工夫した。分教室の小学生と中学生が一緒に交流することのできる機会を各授業や行事で設定したことで、お互いが成長していく場面を多く見ることができた。分教室に在籍する児童生徒の教育課程や、精神医療センター分教室としての地域支援の在り方等を見直していきたい。

阪大分教室：

長期入院の児童生徒が在籍している。小児がんで約１～２年、常時５名以上の心臓移植待ちの児童生徒が在籍している。今年度は、１・２か月の在籍もあった。今年度も院内での制限のため、教室の使用や面会、行事実施の人数等に制限があった。制限による児童生徒のストレスを発散できる場の設定が難しい。今年度、運動会は１種目（玉入れ）で実施、学習発表会も縮小して実施した。今後、病棟とも連携しながら、長期入院の児童生徒のストレスを緩和することのできる取組みを考えていきたい。

滝井分教室:

不登校による転入生徒が多かった。不登校に対してのアプローチとして、退院後に地域校につなげていくためのカンファレンスの実施や、地域校の先生や保護者への支援等に重点を置いた取組みを行った。地域支援の一環として実施している滝井セミナーについては、次年度も参加者のニーズを踏まえたセミナー内容に向けて検討している。増加傾向にある不登校の児童生徒へのアプローチについても、今後の課題として考えている。

枚方分教室：

在籍数は少ない状況が続いた。今年度の取組みとして、オンラインでの活動とともに、フライトシュミレーターの体験会を行った。入院している児童生徒にとって、体験的に学ぶことのできる喜びは非常に大きいように感じた。他に、病棟での夏祭りや冬の行事などを実施した。冬の行事では、楽器を使っての演奏会を行った。演奏会という目標があることで、緊張感を持って練習に取り組む子どもたちの姿が印象的であった。

子どもたちへのきめ細やかな支援に向けて、多職種カンファレスに週一回参加した。また、病棟内の部署と連携することで、発達課題のある児童生徒への対応をスムーズに行うことができた。

中学生の評定について、今年度実技教科の課題であった音楽での歌唱や演奏、体育はラジオ体操の様子を録画し、提出している。

質疑応答：

特になし。

（２）令和５年度学校自己診断の結果について（教頭）

第２回で連絡させていただいた各種アンケートより令和５年度の肯定回答率と令和４年度の肯定回答率との比較値を比較して示している。【児童生徒】では、昨年度から10%以上減少している項目の結果・考察について、10%未満５%以上の項目との関連性も踏まえ記載している。今回から新設されている項目 11 の ICT については、比較項目

が無く、数値も低いため、学校としてはICT機器のハードソフトの更新とともに、教員一人ひとりが児童生徒の深い学びの実現に向けた効果的な端末の活用に、管理職としても研修など設定して努めていきたいと考えている。【保護者】では、肯定回答率が５％以上の変化というところに考察を加えている。【病棟関係者】とも併せて、比較数値の差が小さいため、アンケートの記述回答より考察を加えている。【教職員】では、肯定回答率が10%以上変化のある項目について考察を加えている。

質問応答

山田　委員：

御校の場合、在籍に関して、通年の児童生徒もいると思うが、出入りの激しい中で、生徒、保護者のアンケート結果がどれだけ学校経営に結びつくのか若干の疑問がある。

教職員の設問数が27問、他の学校ではもっと多いケースもある。項目の多いことに反対の意を強く言ったことがあり、検討しますという話があった。委員会からの必要項目があることを踏まえ、項目数が多いことに疑問を感じる。学校長の評価指標になるのであれば、【教職員】に関して、質問数の精査を考えていく必要があるのではないか。そのあたりの検討をお願いしたい。

校長：

働き方改革や ICT の１人１台端末などの項目が増えている。ご指摘いただいた内容については【教職員】に限らずアンケートの項目を精査、学校の課題と評価が一致したものになるように検討していく。

齋藤　委員：

各アンケート項目の「学校は楽しい」というのは、年々下がっているように思うが、学校としてどのように解釈しているか。

教頭：

この項目の考察として、本項目の数値結果だけではなく、他の項目とも関連して考察を行っている。「学校は楽しい」に関連する他項目の数値も低下していることに加え、地域校から本校在籍期間の短さ等も踏まえ考察している。

校長：

学校として一番根幹にかかわる部分と考えている。「学校が楽しい」という答えの中に、子どもたちが何を思って楽しいという答えが出てくるのかとしっかり考えなければいけないと考える。その中心が授業、病気と闘いながら、勇気が湧いてきて、勉強が分かったな、楽しかったな、に結びついていくことが基本的には大事である。もちろん先生方との人間関係、しんどい時に相談にのってもらえるなど、そういったことも大事ですけども、やはり授業のところを「わかる」「できる」授業にするということをクローズアップし、自己肯定感を高めていくような形にしていきたい。来年度の学校経営計

画にも盛り込んでいる。

井村　委員：
　【教職員】の回収率が 98%だが、100%は無理なんでしょうか。そのあたりの原因はなんでしょうか。
校長：
　100%を目ざしていかなければいけない。教職員のとらえというものありますが、回収の状況を見て、繰り返しの言葉かけなど、工夫をして回収率を上げていく。

平賀　委員：
　「学校が楽しい」や「授業が分かりやすい」、「気軽に相談できる先生がいる」など、基本的には先生方の専門性にかかわるものなのかと考える。令和３年度の肯定的評価の数値は非常に高い。病弱教育はコロナによる各種制限がある中で、ICT を活用した授業やオンラインを使用しながらの遠隔授業等で新しい可能性を築いてこられた。少しずつ制限が緩和し、コロナ以前の教育に戻りつつあるが、院内での授業実施の制限の緩和までにはもう少し時間がかかると考える。先生方の中にも、コロナ以降の病弱教育しかご存じない方もいるのではないか。コロナ禍での病弱教育とコロナ後の病弱教育について探ってみても良いのではないか。また、【教職員】のアンケート項目数が多いことについては、統計的な分析手法の活用も考えてみてはどうか。

（３）令和５年度授業アンケートの結果について（教頭）
　回答数は、小学部 74 名、中学部 53 名、高等部１名、計 128 名であった。学校教育自己診断の結果同様に、例年より低下している。分教室ごとの平均値については、本校訪問教育部と精神分教室、滝井分教室の３分教室が昨年度より低下し、阪大分教室は変化なし、枚方分教室は上昇している。分教室に在籍する児童生徒の特性により、アンケート結果に数値の差として表れたと考える。

質問応答
齋藤　委員：
　回答者の多くが３もしくは４をつけているが、１や２としている回答数はいくつあったのか。
教頭：
　各部署で１名程度。
齋藤　委員：
　アンケートの評価数値 3.5、3.8 の理由を探るよりも、評価数値１、２であった回答の理由を探ることの方が大切ではないか。

教頭：
　今後、ご意見いただいた内容についても考察していきたい。

３.協議事項

（１）令和５年度　学校経営計画評価（案）（校長）

●学校教育自己診断の結果と分析

　【学校教育自己診断の結果と分析・学校協議会からの意見】について、こちらから少し説明をさせていただきます。

　【学校教育自己診断の結果と分析】について、【児童生徒】での「学校は楽しいか」や「授業内容の工夫」の肯定的評価は課題である。キャリア教育の項目についても、病弱支援学校に在籍する本校児童生徒の実態及び指導上の配慮等から、評価することへの難しさがある。【保護者】からは、一定評価いただいていると考える。将来に対して不安のある中、どのように指導・支援していくのか、地域校との連携についても引き続き考えていく。ICT の活用については、第２回の学校運営協議会においていただいた意見のとおり、アンケートの数値だけでは判断・考察することが難しい結果となった。ICT の活用が、学びの実現や学びの楽しさにつながっていたかが分かる設問が必要であったと考える。

質疑応答
平賀　委員：
　キャリア教育に関連するところで、アンケート結果より 62.8%と低下している。低下している項目の数値改善を図っていくことも１つの考え方ではある。ただ、今回のアンケートでの結果数値 62.8%については、児童生徒の将来の不安への配慮があったための数値の結果であったのではないか。児童生徒の中には、「退院できないかもしれない」や「大人になれないかもしれない」等の不安を抱えているため、各部署での指導においては意図的に将来的な話題に配慮した授業を展開しているのではないか。病弱教育において、肯定的評価が低いことは必ずしも悪いことではない。肯定的評価を 70%以上目ざしていくことについては、もう少し慎重に検討するべきではないか。

●評価項目について

令和５年度　学校経営計画及び学校評価　３　本年度の取組内容及び自己評価　参照。

質疑応答
山田　委員：
　自己評価を数値だけで評価することには無理がある。自信を持って評価していただきたい。長年、評議員をしているが、刀根山支援学校は ICT をかなり活用している。

校長：
　上方修正させていただく。

斎藤　委員：
　先進校への訪問とは、どのような先進校であるのか。
教諭：
　愛知県大府特別支援学校の高校生支援の取組みについて訪問させていただいた。高校生への支援だけでなく訪問教育実施している。支援学校が病院に併設されており、交流の様子等を学ばせていただいた。また、北海道立手稲養護学校三角山分校については、「訪問教育について学びたい」との依頼を本校が受け、本校の訪問教育をお伝えしている。その後、手稲養護学校三角山分校に訪問し、筋ジストロフィーの児童生徒への教育活動等について学ばせていただいた。広域からの通学児童生徒が多いため、指導・支援に ICT が活用されていた。
首席：
　静岡県立天竜特別支援学校は精神科病院に併設されており、児童生徒の在籍がとても多い学校でした。各学部の自立活動の授業について情報交流させていただいた。進学についての悩み抱える発達障がいのある高等部生徒への取組みは、大変勉強になった。

４.令和６年度　学校経営計画（案）（校長）

　めざす学校像について、変更しておりません。中期目標についても、大きく変更していない。「１　病弱教育における切れめのない支援の推進（１）」を変更している。「定着を図る」とともに、「「わかる」「できる」授業により自己肯定感を育む」明記した。また、今年度のアンケート結果を受け、「２　病気のある児童生徒への支援の充実を図るための専門性の向上と支援の継承」に「（５）　学校経営計画の推進を柱とした学校経営の見える化・ＰＤＣＡ化を進める」を新たに明記している。教職員一人ひとりが学校経営計画を進めていくことで学校経営に参画し、全教職員で刀根山支援学校を作っていることに結び付けて考えることができるようにしている。さらに、「３　安心・安全な学校づくり」には、「（６）　本校・分教室間の連携を深め同僚性を高める」を明記している。本校訪問教育部と４つの分教室であることから、教科教育・支援教育の専門性の向上や各種情報交換等が難しいことがある。ここについて、各部署間の連携を深めて、同僚性をも高めながら進めていきたい。

質疑応答
山田　委員：
　「１　病弱教育における切めのない支援の推進　（２）」について、教員が情報機器を活用することよりも、主語である児童生徒が深い学びを実践していくことに重点を置い

た評価指標とすべきである。

齋藤　委員：
　次年度から本校の在籍がなくなるが、病弱支援の学校としての専門性の維持・継承について、児童生徒を見たことのない教職員が指導・支援することが考えられる。教育委員会の考え方もあるとは思うが、ハードルの高い課題である。

井村　委員：
　評議会として承認します。

５.その他
　特になし。